



医療レジリエンス 医学アカデミアの社会的責任

福原 俊一 編集代表

B5 頁144 2015年

本体 2,800円+税

[ISBN978-4-260-02147-0] 医学書院刊

評者 柴垣 有吾

聖マリアンナ医大教授・腎臓・高血圧内科

本書は2015年に京都で開催されたWorld Health Summit(WHS)のRegional Meetingで取り上げられたトピックをそれぞれの専門家が解説したものに加えて、同会議の会長を務められた京都大学医療疫学教授の福原俊一先生による世界のリーダーへのインタビュー記事から成っている。WHSの全体を貫くテーマは「医学アカデミアの社会的責任」とされ、さらにそのキーワードとして医療レジリエンスという言葉が用いられている。

大変に恥ずかしい話ではあるが、私はこれまでレジリエンス(resilience)という言葉の意味をよく知らなかった。レジリエンスはもともと、物理学の用語で「外力によるゆがみをはね返す力」を意味したが、その後、精神・心理学用語として用いられ、脆弱性(vulnerability)の対極の概念として「(精神的)回復力・抵抗力・復元力」を示す言葉として使われるようになったという。今回、評者がこの書評を依頼された理由を推測するに、評者が最近、超高齢社会における現代医療の限界・脆弱性を指摘していたことにあると思われる。もっともその指摘は身内に脆弱高齢者(frail elderly)を抱えた個人的体験によるもので、アカデミックな考察には程遠いものである。

今後の少子高齢社会や日本の社会・経済的現況を考えるに、高度先進医療はmajorityである高齢者が享

受できる医療ではないはずであるが、医学アカデミアはこのお金に糸目を付けずに医療を志向しているように思えてならない。また、この長寿社会においてより切実なアウトカムは延命ではなく、「ピンピンコロリ」、つまり、生きている限りのできるだけ長い期間、身体・認知機能の維持によって尊厳を持って生きることであるはずなのに、いまだに多くの臨床研究・臨床試験のアウトカムは死や臓器保護と、患者の思いとはかけ離れているように思える。これらは個人的には医学アカデミアのネグレクト(neglect)であり、社会的責任の放置であると考える。このような意味から、医学アカデミアの社会的責任を再認識し、かなりゆがんだ医療を矯正して、医療にレジリエンスを与えようという本会議はまさに時代の要請といえる。

私は日常業務に追われ、大変残念ながらWHSに参加がかなわなかったが、本書を読むことでその会議を疑似体験できた。私の未熟でおぼろげでしかなかった思いが、本書の内容によって強い信念に変わり、また、今後の方向性に示唆を与えてくれた。特に、個人的にこの思いを共有するアカデミアのリーダーが非常に多くいることに強く勇気付けられたことが一番の収穫であったと感じている。現代医療に少なからず疑問を持ち、今後の医療の行く末におぼろげな不安を感じている方にぜひ読んでいただきたい。